

厳冬のシベリア四年間

福井県 福田 薫

昭和十九年十二月二十日、私は現役兵として京都中部第四〇部隊に入隊しました。総員百三十人。私服から軍服に着替え広場に整列すると若い将校が「お前たちは満州要員としてこの部隊に入って来た。四、五日ここにおいて満州に転属だ」と言われました。聞かされたとき、満州ならば第一線ではないから生命は大丈夫だと、そんな気持ちでした。

十二月二十四日、部隊の近くの乃木神社に参拝、二十五日午前二時ごろでした。部隊出発、京都駅に着。各部隊より集合した新兵ばかり軍用列車に乗車、午前六時ごろ下関に向かって出発しました。

二十六日朝、関釜連絡船に乗船、釜山より軍用列車にて一路満州に向かって出発しました。

十二月三十一日夕方、ハルビンより数十キロ北寄り

の周家の満州第六二六一部隊（独輜五七大隊）に到着。同部隊に入隊しました。翌朝起床、練兵場に出て驚いたのは、五、六センチもある一面の霜柱。その上に素手で腕立て伏せをやらされたのには参りました。

これもお国の為かと自分に言い聞かせて、真冬の零下三十度の中で一期の訓練を受け、二十年三月二十日、一期の検閲も終えたのです。検閲が済んで二、三日後、教官に呼ばれ「福田、お前も下士志願をしろ」と言われ、志願することになったのです。四月一日に一緒に入隊した者のうち、十五人が一等兵に進級しました。四月十日より下士候の厳しい訓練が連日続いたのです。

そして忘れもしない、八月十五日正午前だと思えます。「全員集合」の命があり、部隊長より「今から天皇陛下の玉音放送があるから静聞するように」とのことでした。聞いているうちに、ああ日本は負けたんだと全身の力が抜けて、その場にくずれてしまいました。

ソ連の兵隊が入って来たのは十八日でした。すぐに

武装解除されました。その日すぐには連れて行かれず、二十日の朝、ソ連兵が来て、ただいまよりすぐに出発するようにとのことで、食糧等を車両に積み込み馬に引かせ、横道河子に向かって行軍でした。何日歩いたかは記憶にありませんが、横道河子に到着して、ここからは列車だとのことで馬は放してしまいました。ここで二日ばかり野宿でした。各所から集合して来た部隊が、必要がなくなつて放した何百頭とも知れない馬が群をなして町中を走り回っている様は、今も脳裏に焼き付いています。

横道河子からは列車で牡丹江まで行き、ここで大集結でした。おそらく方を数える将校から兵までが集まっていたと思います。牡丹江では我々が入る建物はなく、寝る所を作らねばならず、四、五人が仲間になり板切れや木切れ、トタン板のような物を集めて雨露を凌ぐだけの小屋を造り、十月二十日まで牡丹江におりました。

その間、部隊が持って来た食料もだんだん少なくなり、背に腹はかえられず、各自の持ち物、時計、万年

筆等、金目の物を満人に売ったり物と換えたりして、どうかか飢えを凌いでいたのです。そんな生活ですの水も十分になく、薪もなく、当然風呂などありません。洗濯もできず着たきり雀です。シラミは湧き放題で、体中にブツブツができ、頭の毛の中にまでいる始末でした。今思い出しても身の毛がよだちます。

十月二十日朝「集合」の命があり、「ただいまより大隊の編成を行う、名前を呼ばれた者は指示した列に整列せよ」とのことでした。一個大隊千人でした。私の大隊長は部隊の中隊長で、以下三百余人に外の部隊からの編成で一大隊ということでした。

牡丹江の駅に着くと貨車がいっぱい並んでいます。指示に従い乗車しました。入って見ると、床にムシロのような物が敷いてあるだけです。そこに詰められるだけ入れられ、ソ連兵が自動小銃を持って四人ばかり乗りました。出発したのは夜中の何時か記憶にありません。トイレは小の方は乗降口の戸を開いて済まし、大の方は列車が停まったときに外に降りて用を足したのです。ソ連の監視兵は「ヤボンスキーソルダート、

スコーラ、ダモイ、スコーラ、ダモイ（日本の兵隊、すぐに帰れるぞ）」と繰り返して言ってくれました。本当に帰れるんだと信じていました。緩芬河を経てシベリアに入り、一日、二日走ったかわかりませんが、停まっている時間が半日以上もあったので、ここはどこかと尋ねると、シベリア鉄道だと教えてくれました。

戦友たちと「おい、もうすぐにウラジオストックだぞ」と喜び合いました。それからどのくらい時間が過ぎたかわかりませんが、列車が走り出しました。「ああ、もうすぐ帰れるぞ」と内心喜んで眠りにつきました。

二日ばかり過ぎ、列車が停まったので皆が用足しに降りました。すると誰かが「おい、この列車は西へ西へと走っているぞ、ウラジオなら東の方向に行かんなあかんのだ」と叫んでいますので、皆が集まって来ました。すると「見ろ」と言って握っているのは磁石です。かき分けて近づき見ると、確かに西北を指しているではありませんか。その人は軍曹の襟章を付けていました。それを知って「奴らは我々を騙してどこ

かへ連れて行くんだ、ああ、もう帰れないぞ」と皆が抱き合いました。帰れるという希望もなくなり、気が抜けたようになりました。寒さは増して来る、腹は減る、生きた心地がなくなっていく。それでも、こんな所では死ねないと自分に言い聞かせて頑張ってきました。

十一月二日の夜明けだったと思います。列車が降り、下車するように指示があり全員が降りると、これから行軍だと伝えられました。降りて驚いたことには雪が降り、下には三、四センチの雪が積もり、満州でもこんなに早く降ることはなかったのに、本当に驚きました。さて、それから大変でした。雪は降りしきる、防寒具はなく、靴は革長靴、腹は減る、飢えと寒さのノロノロ行軍。ソ連兵は「ヴィストラ、ヴィストラ、ダワイ、ダワイ」と叫ぶ。いくら叫ばれても気力はなくなり、倒れる者も出てくる始末でした。精も根も尽き果ててしまったのです。

行軍が始まって六日目の午後のことでした。小休止の命が出た。皆、その場で雪上に寝転んでしまいまし

た。十五分か二十分くらい休んだのかわかりませんが、「出発」の叫び声に目を覚まし立とうとしたら、右隣におる友が起きないのです。名前を呼んで「おい、出発だぞ」と叩くが起きません。左隣の戦友に「おい、こいつ変だぞ、起きないぞ」と言うと、彼は胸を開け手を入れて「冷たくなっておる。死んでおるぞ」と言つて胸のボタンをかけ、すぐに小隊長に連絡すると、小隊長がソ連兵を連れて来ました。私たちはどうすることもできず、「さようなら、成仏してくれよ」と言つて彼を残して出発したのです。飢えと寒さと栄養失調で、我々の大隊でも幾人もの戦友たちが亡くなつていったのです。明日は我が身かなと淋しい思いにかられながらも、何とか命を承らえて父母のもとに帰らねばと神仏に祈りながら行軍を続けたのです。十日間の行軍でモシカと言う所の第八〇一収容所に入りました。後でわかつたことですが、我々が入つた収容所は一九一七年のロシア革命で捕らえられた白系露人を収容し、シベリア本線のイズベストコーワヤからコムソモリスクに通ずる森林鉄道の建設を完成させ

たのだそうです。それが独ソ戦で資材不足により線路を撤収してしまつたのです。それで我々は線路の敷設と伐採、製材、搬出等が主な作業でした。

収容所に入つて四、五日は班の部屋割り、収容所内の掃除、作業班の人数割り等で過ぎました。収容所には四隅に櫓が建ち、その上に自動小銃を持った監視兵が昼夜立っていました。

いよいよ作業開始の日です。門の所に作業班別に四列縦隊に整列すると、ソ連の小銃を持った監視兵が人員の点検をするのですが、何回となく数えるのです。

何と頭の悪い奴らだと思ひました。それが終わると作業に使う道具を渡され、現場へ出発です。私は伐採班に入りました。私の生まれは福井県下味見村という県でも杉の産地ですので、子供のときから山仕事には慣れていたので、仕事そのものは辛いと思つたことはなかつたのですが、寒さと食不足にはほとほと参りました。一食四百グラムの黒パンと野菜のスープでは、仕事のノルマを達成するにはほど遠く苦勞しましたが、それでも何とかやり抜き、ロシア人の現場の

監督にも認められるようになり、陰から菓子や煙草をいただきました。そんなことがあるようになり、一層作業に身を入れるようになりました。

忘れもしない三月二十日の午後、伐採中に木が頭に当たり、額と右手に大怪我をしました。収容所にはロシア人の医師も日本人の軍医さんもいましたが、医療用具もなく応急手当てだけ施して、翌日テルマという所の病院に入院して手当てを受け、約一カ月いて退院したのです。私が退院したときには伐採は三月末で終わっていました。

伐採班の者は違う班に分かれて作業にいたので、退院した私は、もう外での仕事は怪我をしたためか嫌気がさして、何か建物の中での仕事をとって大工や指物師の仕事場を見に行ったところ、年老いたロシア人が桶を作っているのです。私はそばに寄りジッと見ていますと、あまりよい仕事ができないようなので「ちょっと私にやらせてくれないか」と手真似で言くと「やってみろ」と言うのでやってみました。出来上がった品物を手に取って「ヤボンスキー、オーチン

ハラショウ」と言って、明日からここに来て仕事をしろ、所長には俺が言うからとのことで、桶作りの作業をするようになったのです。実を言うと私の父親は桶屋で、私は高等小学校を出ると入隊するまで父親と一緒に仕事をしていたのです。それからは建物の中の仕事ですので、暑さにも寒さにもあまり関係なく作業ができました。

二十一年の六月頃からは健康管理にも気を配って、月一回の検診、一週間に二回の風呂、シラミの消毒、散髪は一緒に入所した理髪師が二人いたので、長くなればいつでも自由時間にできました。休日も月二回はあり、また五月一日のメーデー、十一月の革命記念日は休みでした。そのころには食糧の方も、入所当時を思うと大変よくなりました。

二十一年の十月の終わりごろ、所長に呼ばれて、何事かと所長室に行きますと、笑顔で迎えてくれ「福田、ご苦労だけれど隣の八〇二収容所に一カ月ほど行ってほしい」とのこと。なぜかと聞くと、浴場の湯を沸かす桶が傷んで風呂に入れなくて困っているの

頼むと言われ、早速翌日出張ということになりました。私の收容所の近くには八〇一、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、三〇六の六收容所が七十キロほどにあつたのです。それからは、ほかの收容所には桶屋がいなかつたので、各收容所に一カ月、二カ月と回って桶作りでした。どこへ行つてもよくしてもらい、技が身を助けてくれました。

そのころより民主運動とか叫ばれ始め、やれ集会だ、批判会だ、やれ講習会だと、皆作業で疲れているのに顔を出さなければ非民主だとか反動分子だとか言つて槍玉に上げられ、二、三人のボスの存在の者が作業にも出ず、私は腹立たしく思つていました。私は全然興味もなく、都合のよいことにあちらこちら回つて歩いていたので、作業のお蔭で深入りせず済みました。

收容所生活も二年余りになるとロシア人とも懇意になり、またそのころより作業のノルマ達成度に応じて一カ月の給料を最高百五十ルーブルまで貰えるようになり、嗜好品なども十分に買えるようになり、まあま

あの日々を送っていました。

二十三年に入ると鉄道の敷設も済み、列車が一日二往復するようになり、我々の收容所付近にもロシア人の家族が増え、にぎやかになりました。そのころより帰国の話が耳に入るようになり、あそここの收容所も帰つた、こちらからも帰つたと伝わつて来ました。五月に入つて初めて我が收容所からも四十人の帰国者が出た。もちろん身体の弱い者、老いた者からでした。

皆が、我々にも近いうちに回つてくるぞと喜びでいっぱいでした。それから一、二カ月置きくらいに二十人、三十人と帰つて行きましたが、私の番はなかなか回つてきません。とうとう四度目の冬を迎えることになりましたが、体さえ丈夫であればそのうちには帰れるだろうと、半ば諦めのような気持ちになつておりました。

二十四年の一月に入ると、シベリアは今までにない強い寒波に見舞われました。来る日も来る日も零下十五度、四十七度という厳しい寒さです。最低零下十四度を記録しました。作業は零下四十度以上の場合

は休みでした。その厳寒の冬も四月に入ると少しずつ日も長くなり、日増しに暖かくなり、また帰国する者も出発して行きました。ああ今年には帰れるかなあと心待ちにしていますが、順番は回ってきません。そのころには月に二度、三度と帰って行きました。残っている者はもうわずか六十人程度でした。夏が過ぎ、また寒さが身にしみる十月に入り、ああまた今年も帰れなかつたか、また厳寒の冬を越さねばならないのかと、親や弟妹を思い浮かべながら自分に言い聞かせていました。

ところが、忘れもしない十月三日の朝、所長に呼ばれ所長室に入るなり、「福田、ダモイ、ダモイ」と私の手を握り「すぐに支度をして午後の列車でイズベストコーワヤに行け、駅には係の日本人がいるから」とのことです。私は夢ではないかと疑ったくらいでした。しかも私一人です。涙が出てきて、「ありがたいとございます」の言葉も出てきませんでした。

駅は収容所の前三百メートルくらいの所なので、別に支度と言っても何もなく午後一時発の列車には十分

間に合いました。収容所を出るときは皆は作業に出ていて五、六人くらいしかいませんでしたが、「ごめんよ、私一人先に帰らせてもらうよ」と言って手を握りしめ、別れて駅に行きました。駅には所長さんはもちろん、奥さん、それにはかのロシア人の奥さんたち四、五人が見送りに来てくれました。私は一つの収容所で、どこにもかわることもなく四年間をモシカで過ごせたことは所長のお蔭だったんだなあと、感謝の念でいっぱいでした。四年間、本当にありがたいございました。「ナチャーニク、スバシーボ（所長、ありがとうございました）」と心からのお礼の気持ちで、所長さんはじめ奥さんたちの手を力いっぱい握りしめて列車に乗りました。九四年間のモシカ八〇一収容所、さようなら、ありがたいと、見えなくなるまで振り返ったのです。私は自分の技のお蔭と、心の優しいロシアの所長さんのお蔭で割と楽な抑留生活ではなかったかなと思っています。

四時間余りでイズベストコーワヤ駅に着くとすぐに係の人が近寄って来て「八〇一の福田君か」と尋ねら

れ、「そうです」と言うと、一緒に来るように言われ、駅から十分ぐらい行った所の大きな建物に連れて行かれ、中に入ると、床は板張りの大きな広間で大勢の人がいました。係の人に連れられ小さな室に入るとロシア人の将校が三人おり、名前、生年月日、階級、作業等を聞かれ、三十分ぐらいで終わり、明日の朝列車に乗るからゆっくり休むようにと親切に言ってくれました。部屋を出たときに係の日本人が、「福田君、君はよい所長さんの所においてよかったなあ」と。「八〇一収容所から君一人というのは、所長さんがいろいろと手を回して気をつかってくれたんだよ」と言われ、「はい、よく分かっています。駅までも奥さん共々見送って下さったので、よくわかっています。ありがとうございました」とお礼を言い、皆がいる広間で休みました。

翌朝七時に朝食を済まし、すぐに宿舎を出発、駅までは十分ほどです。我々が乗る貨車は駅に入っていました。我々の宿舎以外からも大勢集まっていました。貨車は五十トン積みの貨車で、中央に乗降口、左右を

上下二段にした車両でした。トイレは乗降口の所に小だけ外に流れるようにしてあり、大の方は停車したときに外に出て済ませますのです。二十四年十月四日の一時間過ぎ、イズベストコーワヤを列車は発車「四年間のシベリアよ、さらば」の気持ちでした。

ナホトカに着いたのは十月十七日、約二週間列車の旅。貨車だから外は全然見えず、昼夜一度停まって外に出たときだけ光に当たるだけ。でも、四年前に入るときの気持ちと正反対、陽が当たらなくとも心が明るい、すがすがしい気持ちでした。ナホトカの宿舎に入ると、各収容所からの大勢の戦友たち、皆それぞれに長年の苦労話、また古里の話、皆の喜びに満ち溢れた顔。丸四年間、こんな「すがすがしい顔」を見たことはありませんでした。

乗船手続きも済ませ、十月二十二日早朝、遠州丸に乗船、一路舞鶴へ。海はおだやか、誰一人船酔いする者もなかったように思います。午後四時ごろ、ボーボーと汽笛が鳴るデッキに上がってみると、向こうに、反対方向に進んで来る大きな船の姿、船員さんが

「あれは興安丸でナホトカへ迎えに行くのだ」と説明してくれました。

二十三日の夕方、日本の山々が見えてきました。そのとき、ああ待ちに待った日本に帰って来たんだと目頭を押さえました。

それからどれくらいの時間が過ぎたか記憶にありませんが、舞鶴の港に着いたのは日暮れでした。係の人の説明で、今晩は船の中で泊まり、明朝上陸して復員手続きをすることと、その晩は船で泊まりました。翌二十四日早朝上陸し、検疫を済ませ、復員手続きを終えて県の復員事務所にて手続きをしました。

県の復員事務所で留守家族名簿を見たときに、世帯主が父ではなく母の名前になっているので、ああ父は亡くなっているんだと、目の前が真っ暗になり、その場に打ち伏してしまいました。

私が入隊するときはあんなに元気で見送ってくれた父。私の帰りをどんなに待っていてくれたかと思うと涙が止まらず、気が遠くなる思いでした。しかし、これから私がしっかりしなければ、七人もの弟妹を一人

前にしていかねばならぬとその場で気を引き締め、もう涙は見せまいと決意したのです。二日目は一人一人呼ばれて、シベリアでの作業内容とか民主化運動等、委員長は誰だったかとかいろいろ聞かれましたが、私は「何も知らない」で通しました。

二十四年十月二十六日午後四時、村長さんはじめ区民の皆さん、親戚、弟妹に迎えられ、家に帰りました。

敵冬のシベリア四年間、もう思い出したくありません。

【執筆者の紹介】

福田氏とは最初から面識があった訳ではなかった。

私が新潟へ旅行に行った（特急雷鳥）道中、偶然席が一緒だった。旅は道連れじゃないが、暇つぶしに一つ話し、二つ話しているうちにシベリアの苦労話が出た。

「おたくはシベリアのどこに」「はい、私はイズベストコーワヤ、そしてモシカの各収容所を転々と」

「それじゃ苦勞されたでしょうね」「いや、私は手に職があったのでわりに楽でした」「それはよかったですね。私はアングレンの炭鉱に丸四年、重労働させられました。運のよい者と悪い者ではまるで天と地ほど違いましたね」と話しながら名刺を交換した。積もる話に若返りした思いです。

「ああ福田さん、大野の美山のお方ですね。それでは支部長の林俊男さん、ご存じですか」「はい、林さんにはいつもお世話になってます」「実はね福田さん、シベリアの苦勞話を文に纏めて書いて貰えませんか」「大分昔のことで記憶も薄れていますが、書いてみますか」「どうぞお願いします」快く引き受けて下さいました。

(福井県 佐々木 清左夫)

抑留の記録

福井県 谷崎 喜久雄

出生から入隊まで

大正十五年十月二日、福井県今立郡上池田村で谷崎弥左エ門の長男として生まれた。家業は飯米百姓で、当時は五、六反くらいの田畑と山林は十五、二十ヘクタールで、主に養蚕を年二回、春秋と農閑期に少々製炭をして家計を維持していたようである。

当時の家族は、祖父母と私の父母及び叔父も同居し七人だったが、昭和三年に祖父が死去、昭和四年に妹が生まれ、昭和六年に母が病死し、母が亡き後、妹の子守と母のない淋しさは今でもときどき思い出す。昭和八年に小学校に入学、昭和十三年に高等科へ上がり、昭和十六年に卒業後、東京に上京し、小僧をしながら夜学に通った。その年から父が病氣となり、当年十月には秋の取り入れを手伝いせよとのことで家に